

2025年藤学園は100周年を迎えます

この度、広報藤編集委員会に藤学園の原点である札幌藤高等女学校と創立者ヴェンセスラウス・キノルド師についてまとめたものが投稿されました。2025年の学園創立100周年に向け是非多くの方に読んでいただきたく、広報「藤」第73号別冊としてお届けいたします。



ヴェンセスラウス・キノルドと札幌藤高等女学校(1)

文学部 文化総合学科 准教授 松村 良祐

藤学園創立100周年を迎えようとする今日において、薄れゆく過去を現在に繋げ、未来へと眼差しを向けることは我々に与えられた課題の一つであると思われる。しかし、当時の北海道の教育情勢や札幌の他の高等女学校との対比、或いはキノルドらフランシスコ会の活動といった視点からその経緯をまとめたものは限りなく少ない。そこで、先行の諸論考に敬意を払いつつも、上記の視点から本学の前身にあたる札幌藤高等女学校の創設に至る経緯とその特徴を「ヴェンセスラウス・キノルドと札幌藤高等女学校」(1)、(2)の二編に分け、広報「藤」に投稿させて頂いた。

1. キノルドと藤高等女学校

日本において最初のカトリック週刊誌である『光明』(札幌、光明社)は、1957(昭和32)年、フランシスコ会の再来日50周年を記念して「フランシスコ会北海道布教小史」と題し、1907(明治40)年以降の同会の活動の様子をまとめている。そこでキノルドと藤高等女学校の関わりについて次のように述べられている。

「藤学園」という名で知られているこの学校が、創立者ヴェンセスラウス・キノルド師の会心の事業であったことは、特記しておかなければならない。師は死ぬまでこれに極めて大なる関心を寄せておられた(『光明附録』第1179号)。

第一次世界大戦後のインフレによって、学校設立のために用意してきたドイツ紙幣の価値が暴落する中で、クサヴェラ・レーメをはじめとする殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会のシスターらがアメリカのカトリック関係者に学校設立のための寄付を呼び掛ける数千通に及ぶ手紙を書くとともに、設立する学校に少しでも興味を持ってもらおうと私塾を開き、近隣のカトリック信者らに手芸やドイツ語などの外国語を教えたことは比較的よく知られている。しかし、札幌に高等女学校を設立することはキノルドが教皇庁に提出した要望を発端とし、聖ゲオルギオのフランシスコ修道会はキノルドの求めに応えるかたちで来道している。その他、若いドロテオ・シリング司祭をアメリカに派遣し、カトリック系の教会や病院、団体からの寄付集めに当たさせたことや、学校用地の確保を行ったことなど、学校設立に際してキノルドの果たした役割は大きい。上記の『光明附録』は藤高等女学校の設立が北海道においてキノルドの手掛けた事業の中でも会心のものであったと述べている。

2. 北海道における女子中等教育の不足

もっとも、藤高等女学校は、北海道において設立された最初の高等女学校であるというわけではない。北海道において、高等女学校の必要性が主張され始めたのは、1892(明治25)年を過ぎた頃からであるが(北海道教育研究所『北海道教育史 全道編三』799頁)、1895(明治28)年9月3日の小樽新聞では、「札幌に高等女学校を設置せんとす」と題する雑報の中で「北海道未来の世は今日の少女子に在り而して今日の少女子たる果して如何なる教養を受けつゝあるか」と問いが発せられ、尋常・高等小学校を卒業した後の進学先が手芸や裁縫を教える仕立物の稽



ヴェンセスラウス・キノルド師
(フランシスコ会、司祭時代)

古所のような私塾的なところに限られていた現状が説明されている。そこで、こうした女子中等教育の不足を補うものとして1887(明治20)年に設立された北星女学校が取り上げられているが、「此校や固より一種の臭味を帯びたる宗教学校とて之に入學せしむるを心好しとせるもの多し」とあり、その取り上げられ方は必ずしも好意的なものではない。また、その2年後の1897(明治30)年8月13日の同新聞には、時評として「北海道の女子教育」と題する記事が掲げられ、「本道の女子教育は不完全なり、欠點多し、是れ獨り小學教育に就て爾か云ふに非ず、中等教育の設備を欠くに至りては更らに本道女子教育の大不完全、大欠點を示して餘ある」とあり、小学校を卒業した後の女子中等教育機関の設置がやはり望まれていたことがわかる。

北海道において高等女学校設立の気運が高まる背景には、札幌区を中心とした女子の小学校への就学率の上昇や諸外国から見た日本の女子教育の遅れだけでなく、北海道の拓殖政策を進める上での良妻賢母の必要性など、様々な論点が存在している。そして、こうした世論の高まりや、更には北海道および各府県に高等女学校の設置を義務づける1899(明治32)年の「高等女学校令」の公布を受けて、北海道庁は1902(明治35)年に庁立札幌高等女学校を北海道で最初の高等女学校として設立し、私学としては1910(明治43)年の北海高等女学校がこれに続くこととなった。その後の1913(大正2)年から1926(大正15)年までのおよそ10年間は、北海道の各地で多くの高等女学校が設立される時期に当たり、公私立合わせて道内で5校あった高等女学校が5倍の25校に増えている(札幌市教育委員会編『女学校物語(さっぽろ文庫35)』21頁)。そして、こうした状況のもとで、藤高等女学校は道内で23校目(札幌では4校目)の高等女学校として1925(大正14)年に創設されることとなったわけである(文部大臣官房文書課編『日本帝国文部省第五十三年報』下巻「第六表 公私立高等女學校別一覽」36-37頁)。このように、藤高等女学校は道内の高等女学校としてそれほど早い時期に設立されたわけではない。むしろ、後の(2)で見るように、その特徴は5年という修業年限にある。

3. ベルリオーズとキノルド：札幌における男子中学校設立の構想

ところで、キノルドは藤高等女学校の設立から8年後に当たる1933(昭和8)年に光星商業学校を創設しているが、カトリックの男子中等学校の設立は、函館司教であったアレクサンドル・ベルリオーズ以来の構想であった。すなわち、ベルリオーズは1906(明治39)年4月にローマを訪れ、将来の男子中等学校の設立を目指し、後に来道するマリアの宣教師フランシスコ修道会のシスターたちの修道院でミサを行う傍ら、副業として外国語の教授ができる宣教師を派遣してほしいという希望をフランシスコ会総長ディオニジオ・シューレルに語り、シューレルはそれに応え、ドイツ語、フランス語、英語をそれぞれ担当する3名の宣教師を札幌に派遣することを決定した。その中で、ドイツ語の担当を命じられ、宣教師団の長に任命されたのがキノルドである。

キノルドらフランシスコ会の宣教師団は1907(明治40)年1月に来道し、はじめの3ヶ月を北1条教会(北1条東6)の司祭館で過ごしている。そして、4月に日本人信者を通じて北1条東3の地所つきの家屋を購入し、そこを仮の修道院に定めているが、後年になって当時の様子を振り返り、次のように述べている。

聖アントニオの祝日(6月13日)に初めてミサ聖祭が行われた。ご聖体のそばにいと、故郷に帰ったような気がする。皆が心から満足した。この小さな共同体は修道院を秩序立て、共同の祈りと霊的つとめを忠実にいった。寝る前には、聖母が設立間もないこの教会を主の道へ導いてくださるように、皆でクーロン・フランシスケン(フランシスコ会のロザリオの祈り)を唱えた(日本管区歴史編纂チーム編『日本におけるマリアの宣教師フランシスコ修道会の歴史1898-1972』132-133頁)。

ヨーロッパから戻り、キノルドらが住んでいた家屋を見たベルリオーズはその粗末さに驚き、「これであれば、フランシスコも文句をおっしゃるまい」と言ったそうである。この最初の住居の暮らしは非常に貧しく、或るときは金庫にわずか25銭しかなかったため、滞っていた勘定を払うことさえできなかつたとされる。しかし、後年になってキノルドは若い宣教師たちを連れてよくそこに出かけ、「ここに住んでいた人々には、この家のことやここで暮らしていた懐かしい日々のこ



最初の仮修道院(北1条東3)

とが深い憧れをもって思い返されるのである」と語っていたという。

キノルドによって高等女学校の設立が男子中等学校に先立って計画された背景には、上述のように、高等女学校の設立が当時の北海道における喫緊の課題であったことがあるのかもしれない。しかし、男子中等学校の設立が高等女学校とほぼ同じ時期に計画されていたことは確かである。『光明附録』第1181号は、「高等女学校とならんで、男子の中学校を開こうという計画が立てられたのは、すでに知牧区設置の少し後のことで、1916年には早くも市の北部に適当な敷地を手に入れ、それから15年の長きにわたって、その学校経営を快く引き受けそうな教職修道会を探していた」と述べている。

4. 藤高等女学校と光星商業学校：二つのカトリック校

もっとも、当時の土地台帳によれば、キノルドを教区長とする日本札幌教区天主教宣教師社団が北13条東9の光星商業学校の土地を購入したのは、1923（大正12）年9月であって、1916（大正5）年ではない。しかし、札幌の知牧区は1923（大正12）年まで不動産の取得権と保護権を持つ宣教団体の地位を持たず、それ以前は信頼のおける日本人のカトリック信者を通じて不動産の取得を行っていたとされるから（『光明附録』第1178号）、上述の1916年における土地の取得もそうした日本人信者を通じて行われたのかもしれない（土地台帳によれば、光星商業学校の土地は1916（大正5）年3月に個人が購入した後、1923（大正12）年に日本札幌教区天主教宣教師社団に所有権が移されている）。

他方、キノルドは高等女学校を設立するための足掛かりとして1914（大正3）年に北17条西1の土地を借り入れた後、やがて来道するゲオルギオのフランシスコ修道会のシスターたちの住まいとなる修道院をそこに建てたとされるが（仁多見巖編『北海道とカトリック（戦前編）』207頁）、その記録を土地台帳に見ることはできない。土地台帳には土地の購入記録以外の情報は基本的に記載されていない。そこで確認できることは、現在の藤女子中学・高等学校の校舎部分に相当する北16条西2の土地が1919（大正8）年7月に個人によって購入され（事故欄には「耶蘇教移轉」とある）、その後、1923（大正12）年6月に日本札幌教区天主教宣教師社団にその所有権が移されていることである。調べたところ、この土地の購入に当たった人物は、九州帝国大学医学部を卒業後、1916（大正5）年から1924（大正13）年までの9年間にわたって天使病院に勤務し、病院長を務めたカトリックの医師であるが、天使病院はベルリオーズの要請を受けたキノルドがマリアの宣教者フランシスコ修道会のシスターたちと共に設立した病院であるから、キノルドはこの人物と数年来の親交を持ち、学校用地の購入はキノルドが依頼するかたちで行われたのであろう。

このようにしてみると、これら光星商業学校と藤高等女学校の設立がほぼ並び立つかたちで計画されていることがわかる。光星商業学校の学校用地の購入が1916（大正5）年であるの対し、藤高等女学校の経営に当たる聖ゲオルギオのフランシスコ修道会の修道院用地の借入は1914（大正3）年に行われ、このことはこれら両校の設立が当初からキノルドの計画にあったことを窺わせる。当時において中等学校以上の学校は男女別学が原則とされていたことを踏まえ、北海道における喫緊の課題であった女子教育の不足を補いつつ、男女のカトリック校を札幌に設立することがキノルドの思い描いていたことであっただろう。

さらに、藤高等女学校と光星商業学校は、キノルドらフランシスコ会の修道院も含めて、いずれも札幌駅の北側に設けられているが、これは札幌駅の南側の土地が当時一坪50～250円であったのに対し、北側が1坪当たり20～30円ほどと割合と安価であったこと以外にも（札幌市教育委員会編『札幌歴史地図（大正編）』30頁）、ベルリオーズがキノルドらフランシスコ会士に示した札幌における宣教方針が念頭にあったように思われる。キノルドが来道して間もない時期に、ベルリオーズは札幌が北部に向かって将来発展していく可能性を見出し、札幌の北部に活動の拠点を設けるように助言を与えている（『光明附録』第1174号）。

ところで、キノルドが北海道において手掛けた事業は天使病院や光明社、小神学校、教会の設立など多岐にわたり、実際のところ学校の設立はそれら事業の一部に過ぎない。しかし、藤高等女学校が絶えずキノルドの胸の内にあったことは確かであるのかもしれない。実際、本稿の冒頭に掲げた『光明附録』は、キノルドの会心の事業として藤高等女学校の創設を挙げ、「師は死ぬまでこれに極めて大なる関心を寄せておられた」と述べていた。聖ゲオルギオのフランシス



アレクサンドル・ベルリオーズ師
（パリ外国宣教会、函館司教。アイヌ語の
公教要理の作成、小神学校の設立、トラピ
スト会やフランシスコ会、マリアの宣教者
フランシスコ会などの招致を行う。）

コ修道会のシスターたちが来道して間もない頃、毎晩、キノルドが食事を届けるために鍋を携え、シスターたちの住まいを訪ねたことが伝わっている。2025年は藤学園の創立100周年の年にあたる。キノルドが愛した藤高等女学校は、藤女子中学・高校、そして藤女子大学へと姿を変え、いま次の100年へと歩みだそうとしている（後編（2）へ続く）。

*当時の資料の収集・調査に当たっては、Sr.永田淑子と高橋清二氏の他、本学図書館および札幌法務局北出張所、カトリック北11条教会、カトリック北1条教会、カトリック鶴岡教会等のご協力を得た。記して感謝する。

ヴェンセスラウス・キノルド年表

1871年 (M4)	ドイツ、ウェストファーレン州、ギールスハーゲンに小学校教師の家庭に生まれる（7月7日）
1890年 (M23)	フルダでフランシスコ会チュービンゲン管区に入会
1897年 (M30)	哲学と神学を学んだ後、司祭に叙階（7月1日） フルテスライデのフランシスコ会小神学校で教鞭をとり、修練長と修院長の職に就く
1906年 (M39)	教会設立のため、アフリカ東部のドイツ領への派遣が予定され、スワヒリ語の勉強をしていたが、函館司教ベルリオーズの要請を受けたフランシスコ会総長の命により日本への派遣が決定。宣教師団の長に任命される ナポリを出発後（11月14日）、カナダ・アメリカ経由で日本に向かう
1907年 (M40)	横浜に上陸（1月7日）後、札幌に到着（1月19日） 日本語の勉強開始、ドイツ語の教授（110名程の申し込み）
1908年 (M41)	フランシスコ会の修道院創立（北15条東1）、初代院長に就任（9月14日）
1911年 (M44)	ベルリオーズ司教の要請を受け、マリアの宣教者フランシスコ修道会のシスターらとともに天使病院を創設する
1914年 (T3)	札幌に高等女学校を設立したいという要望が叶い、殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会が派遣されるが、第一次世界大戦の勃発により、来道が断念される（7月） ゲオルギオのフランシスコ修道会のシスターたちの住まいとなる修道院の建設（北17条西1）
1915年 (T4)	札幌知牧区の創設に伴い、知牧に任命される（4月13日） 日本人司祭の養成のための小神学校、出版事業として光明社の設立
1916年 (T5)	『週刊公教新聞光明』創刊（1月12日）（日本で最初のカトリック週刊誌） 札幌光星商業学校の設立用地の購入開始（3月7日）
1917年 (T6)	この頃より網膜剥離のため視力の悪化
1919年 (T8)	札幌藤高等女学校の設立用地の購入開始（7月1日）
1921年 (T10)	第一次世界大戦の終結に伴い、殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会の来道（8月18日） ドロテオ・シリング師をアメリカに2年間派遣し、寄付金を募る（9月）
1924年 (T13)	マリア院の祝別奉献式（7月2日）、藤高等女学校の上棟式（9月28日）
1925年 (T14)	札幌藤高等女学校の設立 フランシスコ会の修道院の移転（北11条東2）
1929年 (S4)	パーネモテイコの名義司教（3月18日）、札幌知牧区の代牧区への昇格に伴い、代牧に任命される（4月3日）
1933年 (S8)	札幌光星商業学校の設立
1936年 (S11)	重い心臓病と肺炎を併発（1月）、左目の手術（5月4日）
1940年 (S15)	政治情勢のため代牧の職を退き、天使病院付司祭として隠棲（10月）
1952年 (S27)	心臓病のため、死去（5月22日） 円山のカトリック墓地に埋葬（5月26日）

（年表の作成に当たっては、小野忠亮（編著）『北日本カトリック教会史—人物・教会・遺跡—』323-324頁を参照し、『光明附録』第1173～1190号などをもとに適宜情報を追加した。）

ヴェンセスラウス・キノルドと札幌藤高等女学校(2)

1. 札幌における藤高等女学校

(1) では、北海道の教育情勢や札幌の他の高等女学校との対比、或いはキノルドらフランシスコ会の活動といった視点から藤高等女学校が創設されるに至る経緯について見てきた。その後編に当たる本稿の課題は、藤高等女学校の教育上の特徴を明らかにすることである。『光明』は1907(明治40)年に再来日して以降のフランシスコ会の活動を報告する中で、設立から5年を経た1930(昭和5)年の藤高等女学校の様子を次のように伝えている。

わが高等女学校たる藤学園は、喜ばしくも以前同様、非常に評判がよかった。北海道にいる人で、この学校を知らない者はほとんど一人もなく、毎年遠くからも少女たちが、そのあまり容易でない入学試験を受けに来る。千九百三十年度の新学年には、入学申込者が五百二十一名もあったが、これは従来の同校入学申込者の最高で、札幌にあるすべての女学校の中でもやはり最高であった(『光明附録』第1182号)。

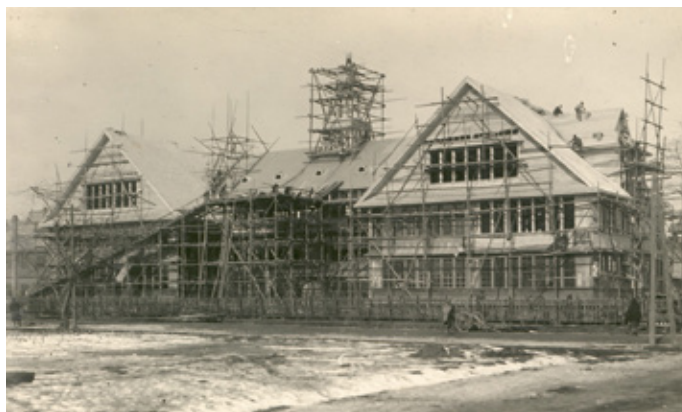
北海道における高等女学校の設立は、1902(明治35)年に北海道庁によって創設された庁立札幌高等女学校を嚆矢とし、その後、明治から大正にかけて北海道各地で多くの高等女学校が設立されている。これまでに見てきたように、藤高等女学校は道内で23校目(札幌では4校目)の高等女学校として1925(大正14)年に創設されているが、その5年後にあたる1930(昭和5)年の札幌には、藤高等女学校以外にも、庁立札幌高等女学校や私立北海高等女学校、札幌市立高等女学校、札幌女子高等技芸学校、札幌市立高等家政女学校など5つの高等女学校が存在している。また、開設にあたっての法令などがなく、地方長官の設立認可のみで開設できるいわゆる各種学校として、北星女学校と静修女学校がある。しかし、上記の『光明附録』は、そうした数ある札幌の女学校の中で当時、一際高い評判を勝ち得ていたのが藤高等女学校であったと記している。



大正9(1920)年来日した3人の修道女。中央がクサヴェラ・レーメ、右がヨハンナ・サロモン・ベルヒマンズ

2. 道内最初の5年制の高等女学校

先の(1)でも述べたように、藤高等女学校は、北海道において設立された最初の5年制の高等女学校であるという点に特徴がある。すなわち、1920(大正9)年に文部省から発令された「高等女学校令中改正」では第9条で修業年限に触れ、「高等女学校ノ修業年限ハ五箇年又ハ四箇年トス但シ土地ノ情況ニ依リ三箇年ト為スコトヲ得」とあるものの、当時の日本の高等女学校の大半は4年制であり、5年制の高等女学校は東京や大阪などの都市部に集中していた状況がある。



建築中の校舎写真。スイスの建築家マックス・ヒンデルの設計。北海道に残るヒンデルの作品としては、函館のトラピスチヌ修道院や、北星女学校教師館、ヘルヴェチア・ヒュッテなどがある。

実際、藤高等女学校の設立された1925(大正14)年において、全国には公私合わせて816校の高等女学校が存在しているが、5年制の高等女学校はその内のわずか134校に留まり、更にそのおよそ半数に当たる60校が東京と大阪といった大都市に置かれている(文部大臣官房文書課編『日本帝国文部省第五十三年報』上巻133頁、下巻「第六表 公私立高等女学校別一覽」36-71頁)。

5年制の高等女学校が設立される背景には、男子中学校との修業年限の均等化や学

力の向上といった狙いが存在している。1925(大正14)年の全国高等女学校長会議でも、「今日ノ女學校ノ教育ト云フモノハ、少シ極端デアルカモ知レマセヌガ、謂ハバオ針ト、讀方ト手紙ヲ書クト位ガ本体デアルカノ如キ規定ニナツテ居ルヨウニ見エマス」という発言が見られ、その後、男子中学校と同様に修業年限を5年に統一することや、数学や理科などの自然科学系の科目の授業時間数を増やすことが話し合われている(文部省普通學務局『全國高等女學校長會議要録(大正十四年十一月)』84-86、107-110、138-152頁など)。

もっとも、男子中学校と同じ5年を修業年限としても、その教育内容が男子中学校と同じものであったわけではない。高等女学校における学科目や教育内容、入学資格は1899(明治32)年に公布された「高等女学校令」によるものであるが、このことは藤高等女学校も例外ではない。そこで、キノルド資料館に所蔵されている当時の藤高等女学校の「教育課程表」を見ると、学科目には修身、国語、公民科、外国語、歴史、地理、数学、理科、図画、家事、裁縫、音楽、体操、教育という科目が並べられ、裁縫、家事、音楽の3科目の合計授業時間数が全体の2割強を占めていることからしても、藤高等女学校が当時の例に漏れず、結婚後の家庭生活を意識し、良妻賢母になるための基礎教養を学ぶ機関としての役割を担っていたことを窺わせる(当時の男子中学校の学科課程の中心は国語および漢文、外国語、数学に置かれ、裁縫や家事といった科目はそこには見られない)。しかし、修業年限を5年とすることで個々の科目の授業時間数は相対的に増加し、学力の向上が図られていることは疑い得ない。1930(昭和5)年

に輩出された117名の第1回卒業生たちの中には、直ちに家庭生活に入った者のほかに、東京女子大学や実践女子専門学校、東京女子医学専門学校、東京女子美術学校に進学した者が見られ、5年間の学業生活を通じて学生たちが上級学校に進む上で十分な学力を身に付けていたことを裏付ける(札幌教育委員会編『女学校物語(さっぽろ文庫35)』29、88頁)。



校舎写真。大正13(1924)年に完成した校舎の南側。9月28日に上棟式が行われた。

3. 藤高等女学校における外国語教育：英語・ドイツ語・フランス語

ところで、藤高等女学校において、外国語教育は特に力を入れたものだとされる。確かに、外国語は当時の高等女学校において必ずしも開設が義務付けられていたものではない。1895(明治28)年に公布された「高等女学校規程」には「外国語、図画、音楽ハ(…)之ヲ欠クコトヲ得又生徒ノ志望ニ依リテ之ヲ課セサルコトヲ得」とあり、女子教育の本体が上述のような家事裁縫にあり、外国語は学力に余裕のある者だけが修めればよい随意科目として考えられていたことを窺わせる。実際、札幌市内の高等女学校における外国語の取り扱いを見てみると、1902(明治35)年に設立された庁立札幌高等女学校では、外国語は英語一言語に限定された上で、「外国語ヲ修メザル者ニハ各學年ニ於テハ図画ニ一時間裁縫ニ二時間ヲ増ス」とあり、外国語は図画や裁縫の履修による代替が認められている(札幌北高等学校創基六十周年記念事業協賛会『六十年』46頁)。このことは、1910(明治43)年に設立された私立北海高等女学校でも同様であり、その学則には「外国語ヲ修メザル者ニハ各學年ニ於テ裁縫ニ三時間ヲ増ス」とある(私立北海高等女学校『私立北海高等女学校創立十周年紀要』15頁)。

他方、藤高等女学校の「教育課程表」を見ると、その欄外には「外國語ハ英語若シクハ獨、佛語の中一ヲ選バシメテ之ヲ課スルモノトス」という記載があり、外国語が必須科目として全学生に義務付けられ、その上で、英語、ドイツ語、フランス語という欧米の主要言語を収めた国際的な視点から外国語教育を行っていたことがわかる。もともと、外国語教育には外国語の習得と共に、その学習を通じて海外の国々の事情について理解を深めさせることで、国際理解の基盤を形成するという二つの目的があるが、藤高等女学校の外国語教育においては、それが英語圏のみならず、フランス語圏やドイツ語圏を含めたより大きな視点で考えられていたわけである。こうした外国語教育は当時の新聞でも藤高等女学校の特色として取り上げられている。1925(大

正14)年2月5日の小樽新聞では、「特色として生徒の個性を重んじて自由な発達を期するほか仏蘭西語、独逸語を随意科として課することなどが加へられている」とある。

全国的に見れば、外国語を必須科目として設置する高等女学校が、藤高等女学校以外にもあったことは確かであろう。しかし、英語、フランス語、ドイツ語という三つの外国語が開設されることは、極めて稀であったようである。実際、当時の高等女学校で外国語が教えられるという場合、その大半は英語であり、フランス語などの他言語をその選択肢に加えることができた学校は、東京の白百合高等女学校や雙葉高等女学校、鹿児島の聖名高等女学校などわずか数校に過ぎなかったとされる(櫻井役『英語教育に関する文部法規』18頁)。

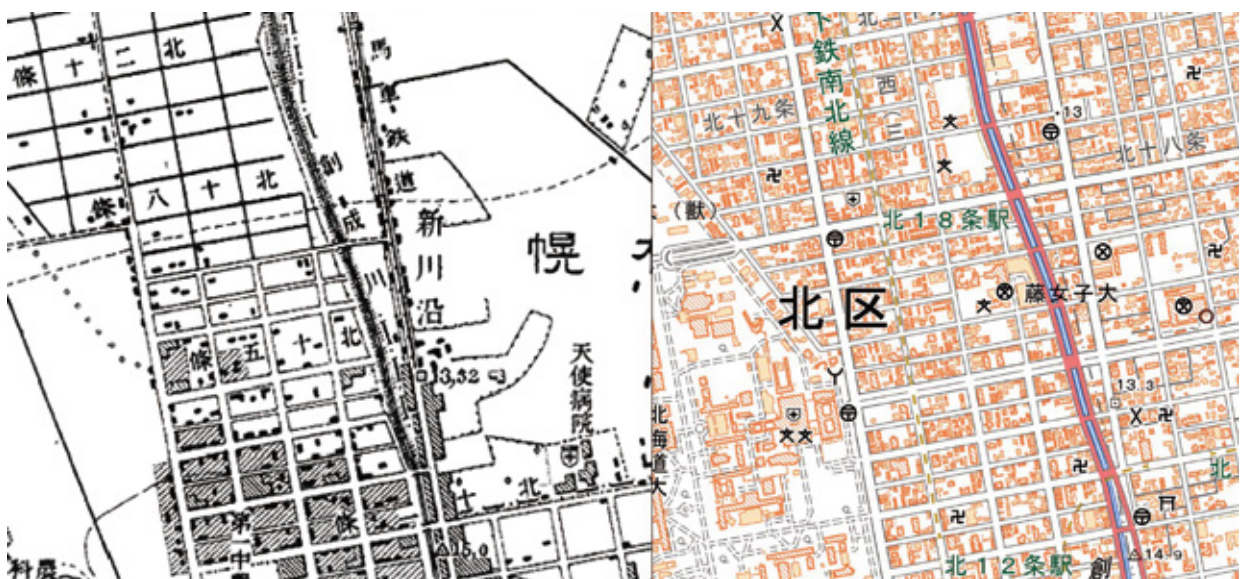
4. 「宗教教育禁止令」と宗教教育

ところで、「教育課程表」の内に宗教科目を確認することはできないが、これは学科課程内外における宗教教育・儀式を禁止する1899(明治32)年の「文部省訓令第12号(いわゆる「宗教教育禁止令」)」に基づいている。先の小樽新聞も「藤高等女学校は全く宗教味を加へず、純然たる高等女学校令施行規則に依り経営される」と述べる。とはいえ、そこで宗教的な要素を全く欠いていたとは思われない。開学を間近に控えた1925(大正14)年3月の或る日、マリア院の応接間で教職員の初顔合わせが行われ、やはり宗教教育のことが話題に上ったようである。創立当初に国語を担当していた高瀬正栄氏はその話題の成り行きを次のように述懐している。

宗教を学校教育の中に取り入れることは厳しく禁じられていた時代のことだから、宗教の色合いを濃厚に打ち出すことは差し控えるべきで、われわれは日本人としての正しい信念を涵養し、日本人女性としての高い教養を身につかせ、自然の間にキリスト教精神をも体得せしめるべきだということに話がおちついたのであったように思う(『藤女子中学校・高等学校創立70周年記念誌 一ゆたけき めぐみー』14頁)。

校舎には廊下のところどころにマリア像やその写真が置かれ、クサヴェラ・レーメは教室に入ると黒板に向かって立ち、短い祈りを唱えてから授業を始めていたという(クサヴェラ・レーメ追悼集編集委員会『愛あるところに』97頁)。カトリックの持つ確かな霊性はシスターたちとの普段の会話やその行いからも自然に感じ取ることができたであろう。

なかでも、宗教教育を考える上で重要であったのは寄宿舎の存在である。藤高等女学校では、1927(昭和2)年に寄宿舎が建てられるまでは修道院や教室の一部が代用されていたようであるが、シスターらと生活を共にすることがキリスト教について考える一つの機会になったであろうことは想像に難くない。また、希望者を募り、保護者の承諾をとった上で、放課後の寄宿舎でキリスト教や聖書に関する勉強会を行うなど、『光明附録』第1182号



大正5(1916)年(左)と現在(右)の北16条近辺の様子。時系列地形図閲覧サイト「今昔マップ on the web」(©谷謙二)により作成。

によれば、洗礼を受けた者の数は1925（大正14）年の創設から1933（昭和8）年3月までの間に学生82名、教職員6名、学生の家族43名に及んだという（ただし、トマス・オイテンブルク『日出ずる国のフランシスコ会士たち』31頁では、これは1925年から1935年までの10年間の入信者数とされている）。

ところで、現在の藤学園の敷地一帯は当時、春になると藤の花が咲き乱れ、近隣の人々から「藤公園」として親しまれていた場所であったという。藤高等女学校という名称はそうした当時の様子をもとに、謙遜・忠実・潔白という校訓—それらはドイツ人と日本人の美德を掛け合わせたものとされる—がしなやかなつるを持ち、花房を垂らす藤の花の姿に重ねられたことに由来する。そこで、謙遜・忠実・潔白という徳目の内に良妻賢母を規範とする大正期における女性の理想像を見いだすことも可能であるのかもしれない。しかし、それらの徳は大正という時代を越え、遙か先へと至る奥行きを持っているようにも思われる。実際、修道的生において、謙遜 (humilitas) は控えめな態度や慎み深さを内実とする徳ではない。むしろ、それは自分が一体何者であるのかという切実な問いかけをもとに正しい自己認識を促した上で、自己を他者へと正しく向け直し、自己をより高みへと上昇させていく力強い徳として理解される。12世紀の神学者であるクレルヴォーのベルナルドゥスは『謙遜と傲慢の諸段階について』の中で、修道的生における謙遜の歩みが心の中にどのような具体的な変化を生み、人間を高次のものへと変容させていくかを段階的に描いている。

創立後、100年を迎えようとしている今日において、当時の様子をいまに伝えるものは少ない。しかし、校舎に咲く藤の花はこの花の内に自らが育てるべき学生の姿を見たキノルドやシスターたちの思いをいまに伝えている。

*当時の資料の収集・調査に当たっては、Sr.永田淑子と高橋清二氏の他、本学図書館およびカトリック北11条教会、カトリック北1条教会等のご協力を得た。記して感謝する。

藤高等女学校の学科目別週間教授時数（キノルド資料館より）

計	教育	体操	音楽	裁縫	家事	図画	理科	数学	地理	歴史	外国語	国語	公民科	修身	
三一	/	三	二	四	/	一	二	三	一	二	五	六	/	二	第一学年
三一	/	三	二	五	/	一	二	三	二	一	四	六	/	二	第二学年
三一	/	三	二	四	一	一	三	三	一	一	四	六	/	二	第三学年
三一	一	三	一	四	二	一	三	三	一	一	四	五	一	一	第四学年
三一	三	三	一	四	三	/	三	三	一	一	二	五	一	一	第五学年